

令和元年度 第2回芦屋市市民参画協働推進会議 会議録

日 時	令和元年11月8日(金) 10:00~12:00
場 所	芦屋市役所北館4階教育委員会室
参 加 者	会 長 渡辺 直子 副会長 平野 隆之 委 員 榑原 貴倫 山岸 吉広 廣瀬 雅宣 松井 順子 欠 席 加藤 裕介
事 務 局	川原 智夏(企画部部長) 浅野 令子(市民参画課課長) 御宿 弘士(市民参画課係長) 三浦 真衣(市民参画課課員) 飯星 雄麻(市民参画課課員)
場 所	市民参画課
会議の公表	<input checked="" type="checkbox"/> 公開 <input type="checkbox"/> 非公開 <input type="checkbox"/> 部分公開
傍 聴 者	0人

1 会議次第

- (1) 開会
- (2) 議題
 - ・第3次芦屋市市民参画協働推進計画について
- (3) 閉会

2 提出資料

- 資料1 次第
- 資料2 委員名簿
- 資料3 第3次芦屋市市民参画・協働推進計画

3 審議経過

(1) 開会

(事務局：浅野課長) ただ今から、令和元年第2回芦屋市市民参画協働推進会議を開催します。市民参画課の浅野でございます。よろしくお願いいたします。

芦屋市市民参画協働推進会議規則第3条で、「委員の過半数の出席がなければ、会議を開くことができない。」とされていますが、本日は、7名中6名がご出席ですので、この会議は成立しております。

また、芦屋市情報公開条例第19条により、会議は原則公開ですので、傍聴人がいらっしゃいましたら、入出しいただきますが、本日傍聴人はございません。

会議録作成のため、会議内容は録音いたします。会議録は発言者のお名前を含め、後日公開いたしますのでご理解ください。進行につきまして

ては、会長にお願いいたします。

(2) 議題 第3次芦屋市市民参画協働推進計画について

(渡 辺 会 長) それでは、議題1に移ります。「議題1 第3次芦屋市市民参画協働推進計画」について、事務局よりお願いします。

(事務局：御宿係長) ◆事務局より資料確認
◆事務局より、資料に基づき説明

(渡 辺 会 長) 事務局より報告のありました計画案に関してお気づきの点や、感想、特徴など、なんでもよいのでご発言ください。平野副会長いかがでしょうか。

(平 野 副 会 長) 前回、芦屋市で取り組まれている市民参画協働のかたちを示すレシピのような計画にしてはどうかという話でした。レシピとは手順のことなのですが、現在できている計画案だと市民活動の事例が書いてあるだけです。例えば、宮塚公園のワークショップを例にとると、公園は市民協働の1つのアイテムです。公園の管理を地元のまちづくり協議会などに委託をする傾向になってきていますが、公園活用のワークショップのような取組が、どのように考えられ、どのような手順やスケジュールとなっているかを示すことがレシピだと思います。

つまり他の公園で何か参画したいと思う人が読んだら、宮塚公園のワークショップを例にこういうことができるという手順書になることが事例集とレシピ集の違いだと思います。レシピとはそれを読めば、料理が実現するわけです。その段取りをたどっていけばゴールに行くということです。もちろん良かった点や学んだ点を書くのはいいけど、そういう記載が必要だということです。それと、進行管理のPDCAサイクルが、計画そのものを評価しているように感じます。市民協働はむしろ実際に進めるプロセスの方が大事です。今後レシピ集のようなものを作っていくこと自体が、計画の中にあってもいいのではないのでしょうか。宮塚公園のワークショップをやった市民が「こういう風にやっていくと面白いよ。」とレシピづくりをして、他の人に情報提供するということも必要だと思います。

先日読んだ本に「裁量の企画」「抑制の財政」「給付の福祉」というパターンが書いてありました。「抑制の財政」「給付の福祉」はよくわかるけど、「裁量の企画」と言うのは言いえて妙だと感じました。つまり実際の取組に関して裁量性が高いのが企画部ということだと思います。さらに転じて言えば、作った計画に沿って実行するというより、作った計画にある裁量として企画の方にシフトするべきだと思います。計画は作った時から古くなっていくので、絶えず新たなことを試みる裁量が必

要なのです。この計画をどう裁量的に使って、そのレシピをどう他の地域の人に真似てもらえるか。例えば宮塚公園でマルシェをした人が、先生として指導に行けばいいわけですよ。レシピになる事例は、そこに関わった人が他の地域に行って教えることなども大切なのではないのでしょうか。またもう一つ、ラボのような取組も非常に大切です。ひとつの実験的な要素もあるので、例えば、市民が調査研究をするというような、そういう仕掛けが市民協働に必要だと思います。2次計画から続いている取組を、3次計画では先行している取組としてヒントを得て、計画の用語を変えていく、それが3次計画だという感覚があった方がいい。

もう一点、市民参画課はどんな予算があるのかという話になった時、横串に成り得る市民参画課としてのツールは、市民提案型事業補助金だと思います。そうすると、それがどう使われて、どういう効果があるのかという分析がないといけません。市民提案型事業補助金というものが、どこまで提案が出てきて、どういう効果があるのかという、一覧リストが必要ではないかと思います。補助金の在りようを変えなければいけないのであれば、現状の補助金の出し方に問題があります。審査項目の中に、2年以降も維持できるような収益性をとるプログラムがあると、配点を高くしますとか。やはりこうしてほしいというのは当該課の中の事業に、どうやって反映させるかまでは、計画だから検討した方がいいのではと思います。当該課の持っている、事業についてはもう少し、良い悪いは別にして、きっちりこの計画の中に示す。もう少し言えば、市民参画課が予算を取る時に、計画と言うのは財政に向けて「ここに書いてあるから来年度から予算を増やせ。」と言うような、そういう意図がないと迫力がない訳ですよ。市民向けにどうするかと言うより、企画部の市民参画課としてここで積極的に予算を取りに行くような議論があってもいいのではないかと思います。

市民に対してメッセージのような計画になり過ぎていて、実際にこの計画を本当に市民が読むかと言うと難しいので、もう少し戦略性があってもいいのではないかと思います。

「裁量の企画」というのは戦うべきがないと予算がほとんどつかないと言われていています。レシピで既存の活動を普及できるような、「抑制の財政」への予算の取り方もあると思います。もう少し市民参画課が手段を増やせるように戦ってほしい。普通は、予算は増えないわけですよ。行政改革としては市民と組んだ方が節約できると言っているわけだから。本来は公園の管理なども市民が関わることで効果があると謳うしかない。「皆さんが参画したら、良い気持ちでしょ。」という世界ではなく、そこは正直に企画部として助けを求めるような、協働の旨みも書いた方がいいのでは。勇気はあると思うけど。でも市民から「そんな節約したいのか。」と言わせた方がいいと思う。芦屋の場合は、総合計画でも結果

的に「高い税金を払っているから、こうするのは当たり前だ。」というアンケート結果が出るわけです。だけど、そのような市民の感覚から転換が求められているので、思い切って協働した方が財政的にも政策効果も高まるし、質の高いものができることとセットで声を上げていただきたいです。

(渡 辺 会 長) 私も平野副会長と同じ考えです。市民にとって市民協働をしたら何が得なのかがよく分からないです。「市はこういう現状で、こういうことが必要。市にとって市民参画は必要なんです。」とは書いていますが、市民にとって、なぜこれをしたら得なのかが響いてこないのです、これを市民が読んでも「フーン」という感じになってしまうと思います。平野先生が最後に言ったこととリンクするのですが、なぜ市民参画協働をやればあなたたち（市民）にとってお得になりますよと言っているのか、ということ、物語性をつけて打ち出さないといけないのではと思います。分かりやすく言えば、何がお得か＝市民参画の有償化でもいいと思う。市民参画をやったらおこづかいが入るような分かりやすい事でもいいのです。それは市にとってもいいことです。なぜなら同じことを市が予算を取って、仕事としてやろうとするとすごく大きな予算がいるけど、市民参画でやれば市としては節約になるからです。一方、市民に対しては「あなたたちはタダ働きではないんですよ。」と言える。「これは両方にとってWin-Winですよ。」と、そういうストーリーをもっと面白く紡いであげる作業が凄く大事だと思います。特にこういう、やらなくてもいいようなことについては、納得させるような、思わず読んでしまう物語が仕込まれていないといけない。そうしないと、巻き込まれてこないというのがひとつです。もうひとつ、場づくりというのが織り込まれていますが、この中に書かれている場と言うのが、すごくソフトな場に偏っている。おそらく予算の問題もあると思いますが、人が集まって何かをするには、ハードの場がすごく必要です。なのにハードとしての場がない地域があります。私が実際に市民活動をやっているのが、芦屋市内のエリア間格差がすごく生まれている。2号線から南は宮塚公園やリードあしやがある。ところが、山手のエリアはほったらかしという感があります。たとえば山手町と岩園町は見捨てられている感じがする。岩園町は約 770 世帯あるのに、町内に集会所みたいな集まる場所はひとつもない。それでも実際に自治会の作業は発生するじゃないですか。お知らせを作ったり、市からのチラシを配りも、自治会長は仕分けして全部やっている。作業する場がどこにもないので、個人のお宅を開放してやらせてもらうということになる。そこでもっと市民参画しろという話になったら、そのエリアの市民は、「市民参画なんか関係ない、だって市から何にも便宜を図ってもらってないし。」となる。

私も先日、市民活動を自分の住んでいる地域でも展開したいと思い、自治会の役員のところへ頼みに行ったら、「そんなことをする前に自治会活動をやってよ。」と言われてしまいました。そのため自治会活動を今一生懸命やって、懐柔している段階です。結局そういう市民感情になると思います。やれやれと言われても、自分達は何も恩恵を受けていないし納得いかない。エリア間格差というのをもう少し見直してほしいなということがひとつあります。

少し前の話に戻りますが、例えば市民参画を有償化することによって、市民参画をボランティア（無償）でやるしかないとなると、何が問題になるかと言うと、年金を貰っている人しかできなくなるんです。要するに時間があって、それで食べていかななくてもいいような人が、市民活動の担い手にならざるを得ない。そうすると、高齢の男性が多くなる。女性は少ないです。女性は功利的な傾向があるので、「そんな何のお得にもならない事はやりません。」という人が多い。男性は社会性を求めているので、比較的やってくれますが、そうすると高齢の男性ばかりが市民活動しているという状況になってくると思います。それを少しでもいいので有償化していくと、子どもがいてたくさん時間は働けないけど、自分のできる範囲で、自分の思う市民活動をやって、それが少しでも利益になればいいなと思うような若い世代のお母さんみたいな人、そういう人たちが市民活動に積極的に関わってもらえるようになるのではないのでしょうか。そうしたシステムが必要ですね。

市民提案型事業補助金について、私も申請をして補助金を受けました。感想を言うと、みんなのためには使える。備品や印刷のためには使えて、その中にいるメンバーに対してはお得な感じのものを提供できる、それは嬉しい。ただ、私はひたすら働いて、一生懸命時間と手間を使うけど、私に対する対価はその補助金では許されていない。あなたが好きでやっていることだから、それに対しての補助はするけど、私のノウハウ、お世話をしたこと、コーディネートやオーガナイズに対しては、「好きでやっていることだからタダでいいでしょ。」と言われてるように、今のような制度だと感じてしまう。そういうような印象を与えられることに対して少し悔しい気持ちがあります。自分としては市民参画に協力、尽力しているつもりだけれど、制度を見るとそのように評価されていない印象を受ける時があります。

だからもう少し現実に即した施策に落としてほしいと思うのがひとつ。それと、この一番最後のページ（32ページ）に書かれていることが実は一番大事で、こここのところに行政の関わり方が具体的に見えてくるように、もう少ししっかりと書き込んで欲しいと思います。今言ったようなことを含んで、市民参画に対する行政の対応や関与について納得できる文言がここに落ちてこない、この協働推進計画の価値はあまり上がってこないと思います。私が感じていることと平野副会長がおっしゃった

ことに刺激を受けて、申し上げたのですが。榊原委員、そのへんはいかがでしょうか。

(榊 原 委 員) いいご意見だなと思いました。僕は情報発信とかITの観点から発言すべきだと思いますが、平野副会長の話を聞いて、会社の経営みたいな話でこの推進計画を見ていました。人・モノ・金で情報も含め、市民参画・協働をどう進めていくかを綺麗に書かれているなと思いますが、おせち料理みたいだと感じました。どれが課題でどれが重みなのか、どの取組にどれだけのコスト意識があるのか、この中からでは読めない。課のポジションとしてどこまで突っ込んで書けるのかが分からない、今度それが書けるかは難しいとは思いますが、なぜこの計画を作ることが必要かという課題感が、いわゆる公助でいつかできなくなってくることを、共助、互助に戻していくということを書かれているのであれば、例えば今芦屋で財政的、数字的にいつか公助から離れるということがはっきりしているものがあれば、何年以内にそのコストを互助自助、民間なりに入れていただいて、このまちがそれを維持しなければいけないのかという、いわゆる危機意識の高い順に一度並べて可視化すると、情報発信としてのインパクトが大きいのかなと思います。例えば医療でいくと、神戸市ではソーシャルインパクトボンドという仕組みを使っています。例えば将来行政コストが10かかるものを、今ボンド式で民間のテクニックも使ってもらい、将来そこが6で収まるなら、その2割の利益は投資家に返しましょうという、仕組みがあつたりするので、よくわかります。自治体が課題情報を、しっかりと市民に出すことによって市民側で対応してもらい、自治体から協働に入りこんでいくということが大事で、公助の部分をしっかり作るというアクションが取れると思います。この位置づけが分野別に分かれているので、その中でコスト意識の優先順位をつけ、課題を並べないと、ぼやっとして見えてくる。いわゆる自治会の地域の見守りなどの取組もありますし、認知症や医療圏の問題など大きなインパクトがある課題と一緒に話し合ってしまうと、次の実施計画に落としていくときに広すぎて、全体にいくらかけるのかという話しになり、どの課のどの予算でこの話を振るかが難しくなると思います。推進計画としては全般的にきれいに収まっているが、ではこれは芦屋にとったらどれに重みがあるのか、これが読めない。これが残念だなと思います。

(渡 辺 会 長) ありがとうございます。松井委員はいかがでしょう。

(松 井 委 員) この計画の9ページを見てどこの団体にも所属していない市民の割合が4割で、自治会離れとか頭が痛いところかなと思いますが、結局、関心があることがあるとすれば、治安とか、スポーツフィットネスになる。

では、地域をどうしようと言うところでは、危機感をあおっても微妙なのですが、現実問題としては財政上に限界があることも言われている。なぜ関心がないかということでは、どこか他人事で、嫌な問題に触れたくないというところを、もう少し芦屋市民だったら賢く理解していただけるのではないかと思うので、そこは市民参画・協働の必要性に関して具体性を持たせて、取組を促進するレシピを作る。その作業そのものが計画に入ってくると、とても説得力があるのであればいいのかなと思います。

自分の体験ですが、他の自治体で「健康とまちづくり講座」をやっていますが、健康はいろいろな要因からなっていて、食事、運動、休息、社会参加、その中には運動もするけど、勉強もあります。たくさん税金が投入されているのに、参加者は勉強したくないと言うんです。前は行政からのサービス状態だったので、新しく取り組んだ私の方針はなかなか受け入れてもらえなくて、非常に苦慮しました。市民への最初の示し方として、全体のプログラムとしてこうあるべきだと、お気遣いのサービスで入らない方がいいと思います。私は若い人たちが大変な状態で、医療費も年間 40 兆円超えていて、介護保険も 10 兆円超えている。その中でこの 40 代から社会参加をしなさいと言われても、どれだけ意欲が高まるか疑問です。社会保障は積み上げですから簡単ではありません。40 兆円の医療費、10 兆円の介護保険で何ができるかと言うと健康づくりしかないんです。例えば自分たちが地域の課題として買い物難民について考えましようとなった時、自分の所は困っていないのに、なんで考えさせられなくてはいけないのかという人もいますが、最初から適切に方針を示した参加者たちは、自分達がそれしかできないのであればやりましようというふうに考えてくれる。やはり、危機感を煽るではないけど、説得していかなければいけないと思います。それを思う中で、どれにも所属していない人たちに何を訴えるかというときに、具体的なことから入ることは大事かなと思います。

福山市ですが、夜、街灯がないんですね。都市部だったら溝は 30 センチくらいでそんなに水も流れていないし、ほとんど蓋もされていて安全なんですけど、地方に行くと用水路の関係で、幅が 1.5 メートルくらいあって、深みも 1.5 メートル、人が落ちて事件になることもありますが、治水の関係とか畑や田んぼに引き込む関係で、ガードレールを作れない問題もある。だけど、福山市、合計特殊出生率が全国でトップクラスです。まちづくりの中で、挨拶週間をやっていて、子ども達も含め、全然見知らぬ人たちが行きかうところで、朝でも夕方でも挨拶をするんです。そういう地域づくりとして地道でお金をかけないようなことをやることで、地域として底上げになるようなことも、例えば小学生とかにしっかり挨拶をしましようとかいうところから始まっていく。子どもたちに挨拶されたら大人は挨拶しないわけにはいかない。私も全然知らな

いけど、ものすごく話しかけて下さいます。地域づくりとして、お金をかけなくてもできることがもっとあるはずで、全国的な事例もあるはずで。

一般的な話で恐縮ですが、行政が市民にお願いすることでお金の節約になるとは、言いにくいと思います。住民税が高い、水道料金も高いと言われていた中で、行政側のお気遣いだと思いますけど、そんなきれいごとを言っている場合ではもうないのではと思いますので、市民に対して遠慮されないほうがいいのかと思います。

(渡 辺 会 長) ありがとうございます。では山岸委員いかがでしょうか。

(山 岸 委 員) 福祉の立場から申しますと、財源の話をされていましたが、地域サポーターが気になりました。地域サポーターの養成に関して、市民が無償でやってくれるのかということとか、私の立場からは非常に関心がありました。ボランティアは個人ボランティアが入ってきていて、ボランティア団体も高齢化してきて後継者がいないところで、では新たな地域サポーターを養成しようとなった時にどれだけの市民の方が魅力に感じるのかなというところが気になるところです。ただ、コーディネート機能は地域の中には必要だと感じます。平野先生のお言葉を借りると、地域のマネジメントをどうしていくのか、今、強み弱みの分析をされているのですが、地域の強みで言うと、いろいろな専門職の方がおられます。市民の方でも防災士の方や、福祉の専門職の立場では地域作り生活支援コーディネーターという専門職も配置されています。そういった方々をどのようにネットワークで結んで、マネジメントするのかということが今後必要なのかなと思います。社会福祉協議会としてもボランティア活動であったり、地域福祉課からの委託で「ひとり一役活動推進事業」をやっている、それは有償ボランティア的に、ポイント制で個人の高齢者のお宅を手伝いに行ったら1ポイント貰えるとか、高齢者施設に手伝いに行ったら1ポイント貰えるといったことについて、地域福祉課が財源を確保して、社会福祉協議会は委託されてやっています。これからボランティアが無償ではなく、どう稼いでいくのかという、地域の中のコミュニティビジネスとかソーシャルビジネスとういうのをどう位置付けて、市民が参加していくというところの、市民参画という視点がこの企画の中にあればいいのかと思います。社会福祉協議会の中で今、生活困窮の相談支援をやっています。40代50代の引きこもり、未就労で高齢の年金暮らしの親に頼るといような人たちに、就労先として、社会福祉協議会でもできることに限界があります。「福祉センターの手伝いに来ませんか。」「居場所のチラシを町内会の掲示板に張ってみませんか。」と、ボランティアとして、引きこもりの方に誘いかけをするんですけど、お金にならないと引きこもりの方も「自分はずっと能力があるんだ。」

と思っている方もいますので、そういった方の能力を発揮できたり、あるいは就労につながるような、技術習得のような就労形態が芦屋の中でもできていけばと思います。宮塚公園のマルシェに参加して収益が入るようなことも考えていかないといけないと思います。中間就労について、イギリスではソーシャルファームというのがあり、イタリアの方では社会的共同といいます。そういうコミュニティビジネスにつなげていく取組もあります。芦屋はどういったかたちでやっていくのか、どうつなげていくのか、この中にもう少し具体性があればいいと思います。レシピの話が前回出ていたので期待はしていたのですが、ここに白紙のページがあってもいいのかなと思います。自分たちのプロセスを作っていく、「自分達ならどういう市民活動を作りますか。」というようなページがあると、より参画しやすくなるのかなと思いました。

(渡 辺 会 長) ありがとうございます。では廣瀬委員いかがでしょうか。

(廣 瀬 委 員) 正直に言いまして、計画が送られてきた時に、「芦屋市はいつもこんな計画を作るけど、作るだけか。」とっていました。しかし、会長や副会長の話を聞いていたら、ちゃんとしているんだなと思いました。

それで、予算の件ですが、実は私、自治会連合会の会計をやっています。自治会連合会って公園の清掃をすると補助金が出るんですね。市の予算から補助金をもらい支払っているのですが、予算の全額を使っているわけではないので、余っている予算を活用して、宮塚公園とか他の公園でやる場合、視点を変えて資金も出せるという調整を市の中でしてみる。まずそこで、予算を少し取る。予算が取れた後は、市が活動団体に補助金を支払うだけというわけではなく、やはり渡辺会長や平野副会長に審査員として参加していただいて、このプロジェクトについては未知数だけど補助金を出してもいいかなという議論をすることもありだと思います。平野副会長がおっしゃった協働のレシピに取り組んだ時に、市の人はこのレシピはダメと言っても、審査員の視点で、「いや、これは面白いよ」と、視点が違うという議論ができるように、そういう補助金の仕掛けを作るべきだと思う。未来に向けて、今の時点はダメなものでも、その先はうまくいく可能性のあるものには補助金を出したらいいと思う。市の人に関与するけども会長や副会長の意見を聞いて協働の取組の促進をやると、それがひとつ。

もうひとつは、先日、秋田県の方と話していて、秋田県は学力がすごく高いが、それはなぜかという話になりました。お話によると「朝ごはんを家族で食べる、これだけだ。」と。家族で朝ごはんを食べるから会話が生まれ、親とのコミュニケーションがとれるし、たったそれだけだっただけ話が出ました。芦屋市も単純なことかもしれないですが、「朝ごはんはみんなで食べよう」とか、そういうことから始めた方がいいと思

ます。芦屋市の地域内でも南と北では市民の考え方が全然違うんですよ。そういう事もあるので、誰でもやれることとなったら朝ごはんは良いかもしれません。「芦屋市は家族で朝ごはんを食べよう」と、そのような推進をしていったほうが、参画になるのかなという気がします。

今回話を聞いていて、平野副会長の話は一步進んだかたちでいいなと思っています。レシピづくりも大事ですが、そういう側面も大事ななと思います。

(渡 辺 会 長) 複数の委員が指摘しているのは、ある程度、市民参画ということに対する人件費も含めた予算化について、もう少し深く考える時期にきているのだと思います。あとレシピに対する賛同の意見が多かったと思いますが、私も平野副会長がおっしゃったように、これを読んだらある程度やり方が分かったとなるようなレシピが大事だと思うし、そこにライブ感もあったら面白いと思います。例えば事例を投稿して編集していけるようなシステムができて、1年くらいたったら投稿が貯まっているとか、そういうものも面白いと思います。それを他市に住んでいる人が見て、「芦屋のあのレシピ集を使ったら市民参画ができるよ。」みたいなものが、少しずつウェブで他の都市や県に広がっていったら、芦屋のステータス、市民参画のステータスは上がっていくと思います。そんなにお金がいることではないし、フォーマット化と集めるシステムを構築していけば、きっと面白いことになると思います。

(廣 瀬 委 員) 素晴らしい考えです。まずはお金。そこから始めてもらって、そんなに市の財源は変わらないから、一度予算を組んでいるものは使っても怒られないと思う。新しく予算をとろうとすると市の方は抵抗があると思うし難しいから、今あるものを使うという考え方が良いと思う。芦屋市の各方面から上にプッシュしてもらって、そんな感じで進めたらどうかなと思います。

(渡 辺 会 長) あとは、場というのは大事だけど、市民参画をするためのハードな場が各エリアに用意されているかどうかということ、調査してほしいと思います。市民参画・協働は「私、市民参画をやります！」って花火をぶち上げてやるようなものでもないんです。なんとなく小さな集まりができて、話をしたり集まったりしている間により良いものに向かっていくというのが、理想的な市民参画だと思います。やっている方も心地いいし、それが市のメリットにもなる。そういう芽吹きをさせるためには具体的なハードな場が必要です。例えば、私の住んでいる岩園町で言うと、770世帯もあるのに集会場が一つもなく、そういう場が岩ヶ平公園だけになっている。露天ですから冬は寒いし、夏は暑い。事務作業もできない。それが現状です。岩園町のご事情は一例ですが、各エリアで芽吹

きを創生できるような、可能性のある場があるかということの確認が必要です。市民参画・協働を進めていきたいのであれば、条件や環境を整えることが大事だと思うので、一度調査してほしいと思います。

(事務局：御宿係長) ありがとうございます。

(平野副会長) 先ほど榊原委員が言った会社経営という言葉から発想して、20ページの推進の体験の中に、市民参画・協働マネジメントという言葉を入れてみてはどうですかと考えました。経営することになったら計画止まりではなくて、実際にそれを維持していくという感覚にもなります。市民参画課として、経営やマネジメントの項目を活動促進として記載されているところと書換えてもいいのではないのでしょうか。そうすることで、課題を調べることが加わります。将来に向けてレシピと一緒に、これから定期的に市民参画・協働を進めるための調査をどうしていくかということだと思います。その時に3ページにある位置づけ図、どの部署で市民参画・協働を必要としているのかという、さっきの榊原さんの話で言うと、どこがどの程度市民と協働しないといけない部署なのかということ把握することだと思います。もちろん防災安全課はそういう事を書くと思う。市民との関係で言うと、横串のイメージを庁内の中で市民参画課がどうやってそれぞれの部署と、市民に発信していくか。行政改革のプロジェクトもその一貫だと思いますが、そういうことを考えていくのがこの課の1つの仕事なんだということ、市民参画を経営するという課としてのスタンスとか役割を、書き込んでいただくと、その際に公園はひとつの鍵だしね。それから自治会館の経営の在り方もポイントとなります。自治会館の担当はどこの部署ですか。

(事務局：御宿係長) 集会所は市民参画課です。

(平野副会長) それをどうするかということもあるし。例えばキッズスクエアは芦屋としての売りじゃないですか。それは市民協働とすごく重なっている感じがするんですね。ひとつの居場所だし。そういうことをお世話するというか。そういう取組も教育委員会側から、面白い情報をもらって、つまり横串だよ、というのがイメージできるようなレシピが良い。そのときに市民参画は何か手伝っているのかと言われそうだけど、それは手伝っていないけどこういう意味があるんだという解釈でもいいと思うんですね。それは区別した方がいいと思う。

それと、芦屋市は学校給食が有名じゃないですか。本まで出して。学校給食を地域給食にできないのかなと、ふと来る時に思いました。つまり学校給食が地域のところに子ども食堂ではないけど、学校給食であそこまでレシピがね、すごいのが出ていて、地域食堂というのは芦屋の雰

囲気には合わないので、どういう言葉がいいのか。横文字の方がいいかも。

(渡 辺 会 長) 私もその地域食堂は外出する機会という意味ですごく大事だと思っています。特に高齢者とこの頃よく遊んでいます、極端に外出できないということに驚きます。したいけど外出できない、こんなにできないのかと、その行動範囲の狭さにびっくりしてしまいます。たとえば岩園町の85歳なら、多くがイカリスーパーまでしか来れないような状況です。健康不安とかいろいろな問題があるので、なにかあってもすぐに自分の家に帰れる範囲にしか行かないんですね。さらに住宅地に住んでいると、家と家との間に店もなくて、ひと休みしたり溜まれるところもない訳です。そういう人たちがちょっとどこかに外出したい時には、安全安心なエリア内で集まりたいとなるんですね。そこに地域食堂みたいな概念を入れるとすごくいいと思います。それはなんとかセンターや集会所でなくても、個人の住宅を使った家開きとか住み開きみたいなかたちで開催してもいいと思うんですね。私はたまにご老人を家に招いてワンコインランチをやりますが、そんな形でもいいと思います。そうすると実際に皆さんすごく楽しそうです。負担にもならないし、そういうものを地域食堂を切り口にして、各地に作っていくのもいいかもしれないです。

(平 野 副 会 長) 各部署が持っている財産と言うか、企画全体のひとつの取組として何かその地域との接点を持っているそれぞれの事業みたいなものを、つまり最初に出てくる庁内版の横串のイメージをまず作っていただくのと、そこで市民との協働がどの程度進んでいるのか、キッズスクエアとか芦屋の売りがあるじゃないですか。各部署の売りを市民協働の方に転換していく。それは市民も関心がありますから。芦屋の名物として。それを市民参画・協働のきっかけとなるよう、考え方が分かる資料を計画の中に入れて、定期的にこれから何年間かけて順番に蔵出しする。面白い取組が30個ぐらいアイテムがあって、計画としてこれから5年かけて順番に出していくような、そうすると計画がいつも生きている状態になります。

(榑 原 委 員) この議論面白いなと思っていて、公開して出していくものとは別に、今この場にいる人に向けて作ってみてもいいのかなと思います。芦屋でフライパンというチームが青空食堂というアプローチで、いわゆる食と公園とかいろいろな場を使ってアプローチをしている。例えばオープンデータでは、ランチルみたいなかたちで、給食の情報と栄養素を出してみる方向に動いて行ったりするけど、結局学校だったり公園だったり地域だったり、食に関する孤食だったり、子どもの課題とかあると思いますが、実際にとある場所でやっていたりすると、地域の外食への配慮と

か移動問題とかどの場所が適しているのかとか、課題はやった人にしかないノウハウがあるので、レシピとして出す部分と、その場でそのレシピが合うのかとか、ノウハウとか、1回どう可視化したら話に合うのかというのを、このチームとやってみるといいのでは、と聞いていて思いました。

(平野副会長) 食はひとつポイントかもしれないですね。

(渡辺会長) 要は書いていることを具現化して、すぐにできることでなくてもいいけどイメージでもいいけど、大枠のイメージではなく、こういう事をやりますというイメージのつながりみたいなものを少し織り込んでいけばいいんじゃないかと思います。

(事務局：御宿係長) ありがとうございます。この計画策定に当たって、そもそも考えてもいなかったことのご指摘もあり、言い訳がましいですが、とても行政的な発想で作ってしまっているなということを感じました。先ほど平野先生から企画にとって、行政にとって計画とは何なのかというお話があった時に、まさにおっしゃるとおり、財政に対して、論理的な思考のもとにやっていっていることの妥当性を担保しているもので、それに一定のお金をつけてくださいというときに、一つの武器として使っていくということだと思っています。ですが、その反面書き込みすぎることによって、もちろん5年先の事も見据えて作っているわけですが、作った時点からどんどん古くなっていくということと、書きすぎると返ってそれが足かせになってしまって、枠を超えた、まさに裁量の部分をやっていこうという時に、それができなくなるという恐れがありますので、それでどうしてもボヤっとした書き方になっています。

(榊原委員) ジャストアイデアですが、宮崎県の方がGithubを使って公募仕様をだしたりしているんですけど、そもそも紙で出すから、固定されるんですよ。その計画が変わっていくのを、デジタルの方が表現できるので、常に変化を書き込んでいくというかたちで出しているところもあります。

(渡辺会長) 変化の過程自体がアーカイブになる、みたいなことですね。

(榊原委員) 計画を作って、そこからさらに計画が作られていくという考え方であれば、いま議論がこうなっているという、いろいろな人の考え方を入れた経緯も残せるので、文書管理に近いかもしれない。最終的に議論として議会で諮った部分は、もちろんポイントを定点で押さえればいいですが、その後入ってくる変化とか実際運用されているものを常に公開し続

ける、時系列が載ったものが存在すれば、引継要素も強いという、新たなものになるのでは。

(渡 辺 会 長) パブコメみたいなものも全部入っているということですね。一元化していくというか。

(榑 原 委 員) そこだと共助空間のような置き方ができるので、公的というよりは、我々の意見もそこに置くことで、そこから議論スタートみたいなものでもいいのかなと思います。

(平 野 副 会 長) 結局、通常の計画であればプラン通りにD oしたかというC h e c k をしているだけにすぎないということです。今の話はプランをチェックした方がいいのかという議論だけど、市民協働みたいな計画はプランが正しいというふうに思わない方がいいということだと思っんですね。プラン通りのD Oというより、プランを超えるD Oができた方がよほど評価は高い訳です。守備範囲を超えて、行政が企画したことを越えて行ったという方が、評価が高い。あるいは、例えばそれをずらしたとか。やはり後ろの書き方をあまりP D C Aサイクルというような話ではないようにして、絶えず計画も動いていきますと。そういう計画であることを議会に承認してもらえばいいんじゃないですか。計画の中身よりは、計画は絶えず変わっていくということ。それが「裁量の企画」ですと。裁量というのはそういうものだ。どうしても5年たったら中間評価とか5年後の評価とかをやる。それは計画に沿って書くことになります。この項目がどこまで、今日のように何パーセントみたいな、そもそもそれをパーセンテージで計画化する方が変じゃないのかみたいな。議会との関係が避けられないというのは宿命なので。だから計画は絶えず変わりますと、今言われたような新しい企画部としての実験ですと。総合計画ではそんな大それた実験は出来ないけど、絶えず変わる計画を一度、提案することが大事です。

(渡 辺 会 長) 今の話を聞いていて思ったのが、市民参画課の新しいアイデンティティをきっちり作った方がいいんじゃないでしょうか。そもそも市民参画課自体が、新しい概念をもって運営しないと、すでにもう陳腐化していて面白くないです。「他とは違う」ことを、芦屋市の市民参画課のアイデンティティにしてもいいのではないですか。

(廣 瀬 委 員) 言葉には書けないけどいいと思う未知数のもの、そういうのは大事だと思います。時代がこんなに変わってきているわけだから。

(平 野 副 会 長) 一般的に当該課が担当する計画を、当該課が課そのものの在りようを

書けないんですよ、例えば地域福祉計画で、「地域福祉課をこうしたい」とは書けない。そこは難しいところです。「こうします」とは書けるけど、「課の組織をこうしていきたい」ということは書けない。他の給付行政は別です。国の制度は決まっているから。だから自由度の高い課について、私の以前からの主張は、地域福祉は特にそうなんだけど、どういふ地域福祉課がいいのかというのも計画に書くべきだというのが私の意見なんです。課そのものを変えるような計画にしてほしい。市民参画課そのものが今後、課としてこういうものを目指していくということを、計画に入れる。それで勝負してください「抑制の財政」に。挑戦してください。

(渡 辺 会 長) 究極的には予算を取ってきてくださいという話になると思います。アイデアはたくさんあると思いますが、それが予算面で阻まれていて、ダメだろうと最初から自分の中であきらめている部分もあるじゃないですか。「そもそもこんな予算がつくわけない。」というふうに。

(廣 瀬 委 員) 使える予算をね、新たな予算はなかなか取れないから、すでにあって使える予算を上手く使うということを考えるといいですね。

(平 野 副 会 長) 広い意味で商売人とおっしゃったけど、そういう感覚は関西では通用すると思うし、さっきの経営というかね。

(渡 辺 会 長) 行政のシーンで商売という言葉を使うと、抵抗感があってダメだと思うので、経営の方がいいですね。「市民参画経営」という概念や言葉。

(廣 瀬 委 員) 残っている予算の獲得にトライする。市というのは不思議なもので、結果が出ればまた予算がつくんですよ。公園は共通しているところがあるから、公園を使ってするということところで、前向きな話をすれば問題ないと思うけど。

(事務局：川原部長) いろいろな意見をいただいて、市民参画課も我々もこの後どうまとめようかなと思っているところですが、いろいろな計画を策定していますが、いつも「じゃあこれでお金が付くのか。」と必ず言われます。やっていくことには必ずお金の必要性があって、「じゃあこれを認めるということはこれにお金を付けるのか。」といつも言われます。そこがなかなか難しいところで、そうはならないところがあります。ただ、方向性としてはこっちに向かっていくと言っていくしかないですし、こういうことが必要なんだと言っていかないといけないと思っています。

実際の運用の中で、常にスクラップアンドビルドしています。お金は増やすことはできませんので、中で調整しながら、強弱のメリハリをつ

けてやっていきなさいと言われておりますので、そのあたりは調整させていただきたいと思っております。

あと、場所のハードの部分もこれも必要性は書けても、予算をつけることまでは書けないというのが、行政の硬い計画です。そこは工夫させていただきと思っております。今回の計画では、我々としてもレシピの部分は大々的に打ち出していきたいという部分はありますが、盛り込み切れていない部分がありました。それとこれからプラスアルファでやっていく部分と、山岸委員に言われた白紙の部分の置いておくというのは、それは私も面白いなと思っておりました。更新していくものが何かのかたちで、そういうのを目指していくようにやっていけないかなとすごく思いました。いろいろご意見をいただいて、私も、市民参画課のアイデンティティは何なのかと、どうしようかなと思っております。いつもながら頭の中に激しい嵐が起こるような会議で、非常にありがたいと思っております。

(事務局：御宿係長) 計画のまとめは皆さんからのご意見の中で調整します。行政はどうしても硬い計画になってしまうというか、そういうところのバランスもありますので、そこは意を汲みながらやっていこうと思っております。

(3) 閉会

(渡辺会長) では時間になりましたので、そろそろ終わらせていただきます。最後に浅野課長から連絡をお願いします。

(事務局：浅野課長) 議論いただきまして、ありがとうございます。本日の話しを受けて、市民参画課で修正させていただいたものを、差し支えなければ会長の一任ということで、渡辺会長にご連絡させていただこうと思っております。

(渡辺会長) それは添削してもいいということですか。

(事務局：浅野課長) ある程度は添削していただいて結構です。

次回の開催につきましては、12月中旬から1月中旬にかけてパブリックコメントを実施後、日程調整というかたちになります。本日はありがとうございました。

(渡辺会長) では以上を持ちまして、会議を終了いたします。皆様お忙しい中ありがとうございました。